

## 神風特別攻撃隊

佐賀県東松浦郡浜玉町

植崎 正己

戦闘機操縦者として私はフィリピン、ビルマと数え切れぬ程出撃。私もビルマ、ランゲン攻撃において、遂に敵戦闘機との空中戦により負傷第一線を退くこととなり内地送還。私を待っていたのは、朝鮮金浦第二練成飛行隊に転属命令であった。

私はこの飛行隊においてただちに少尉、見習士官及び少年飛行兵の教育訓練に専念することとなる。我々の訓練は外見上は何ら変わらない飛行訓練のように見えていたが、実際は想像を絶する特殊教育であり、他国人に理解できぬことであった。操縦技術はもとよりであるが、精神教育に重点を置き日夜訓練に励んでいた。それは肉弾戦で愛機と共に敵艦に体当たりを敢行することで、平常では考えられぬことであり、必死を覚悟の上で実行する。この教育に当たる教官助教の教育指導は、操縦技量と共に精神教育も並々ならぬ苦労があった。

我々錬成飛行隊は仁川飛行場に移転し、いよいよ特別攻撃隊の実技訓練を行うこととなる。朝鮮の漁船を借りて仁川沖に係留し、その船に目標旗を立て、将校または准士官を長として兵12名が乗り、攻撃要領を観察記録する。仁川飛行場においては教官1名学生4、5機編隊にて飛来し、仮想敵艦と見立てた船にまず教官が突撃の模範攻撃を行う。その後次々と学生が各人2回攻撃を行う。その攻撃には水平突撃と垂直突撃がある。水平突撃は敵艦に向かい最大速度にて海面すれすれに敵艦の側面に飛行機もろとも体当たりを敢行する。垂直突撃は敵艦上空より急降下にて体当たりを敢行することで、死はもとより覚悟の上で行う。この華々しい燃ゆるが如き救国の精神は肉弾戦であり、精神教育の根源に基づく何物でもなかった。我々教育する者に対して精神教育を徹底するよとの達示があった。特攻機による戦果が思わしくないため、体当たり直前に目をつぶる故に確立が悪く、更に精神教育を徹底せよとのことで、敵艦に体当たりをしてその敵艦の轟沈を見届けよとの厳しい要求に教育担当の我々も啞然とした。

錬成飛行隊は仁川飛行場での一応の訓練も終わり、金浦飛行場に帰隊し飛行訓練に励む。昭和20年、1、2中隊全員集合の命令に我々は何事であろうかと部隊全員集合する。高梨戦隊長は一段と高台に立たれた。各中隊長の号令により戦隊長に敬礼が終わると、戦隊長も緊張され「ただ今より特別攻撃隊員の氏名を発表する」と言って、中尉、少尉、軍曹、伍長の氏名を発表され、ただちに特攻基地に出発するよう準備をせよとの命令に、隊員全員が騒然となる。特攻戦隊である以上は当然のことで、軍人として動揺すること自体が笑止の沙汰であるが、寝食を共にした戦友部下が命令に従い、国家のためとはいえ飛び立てば決して帰ることのできない死の宣告に、不平不満どころか「言ってくるぞ」と言って黙々と出発準備をする。二度と会う事のできない死出の旅である。

いよいよ出発の日がきた。隊員は新品の飛行服を着用し、戦隊長に敬礼、最後の申告をなし、「行って来るぞ。頼むぞ。おれも後から来るぞ」と、お互いに戦友同士の最後の別れの言葉で

ある。戦隊全員が飛行場に出て、次々と金浦飛行場を離陸して行く特攻機の機影が見えなくなるまで最後の別れに手や帽子を振り、胸の熱くなる思いであった。その後戦局は益々我が軍に不利となる戦況が伝えられ、第二次特別攻撃隊員の命令がいつ来てもちゅうちよする事ないように精神教育もますます徹底される。夏の暑い日差しの中に教官、学生ともに操縦技量に磨きをかける毎日であった。

前畑准尉と私の2人が准士官室で椅子に腰を掛けているとノックの音、「オイ」と声を掛けると緊張した態度で少年飛行兵が敬礼をし、「准尉殿にお願いにまいりました」と言う。「私は何の用か」と聞くと、「自分も攻撃隊員に是非お願い致します」と言う。私は「心配するな。最後は皆行く事になる」と言う、「お願いします」と言って准士官室を出て行った。

その後第二次攻撃隊が編成され、その中に陣内軍曹がいた。午前中の飛行訓練も終わり、准士官室で机にもたれ煙草をふかしていると、ノックをして入って来たのが陣内軍曹である。私に敬礼をして、「陣内軍曹、榑崎准尉殿にお願いにまいりました」と言う。私は陣内は攻撃隊員であるがと思い、「何の用か」と尋ねると、「陣内軍曹、攻撃隊員としていよいよ出発することになりました。准尉殿は『おれが行く時は葉隠れ特別攻撃隊で行くぞ』と言っておられた。その葉隠れを私に頂きたいのです」と言う。私は突然のことで返答に困り暫く考え、「陣内、おまえは佐賀県出身か」と尋ねると、「自分は佐賀県出身ではありません」と言う。陣内が佐賀県出身であれば問題ないが、この葉隠れの有名無類の名誉ある精神を佐賀県人は誇りとしており、他県人に与える事を私はちゅうちよせざるを得なかった。高梨中佐戦隊長の本土決戦には、『特別攻撃隊である以上我が戦隊は全員突撃を覚悟せねばならぬ』との話に、私も本土決戦到来すれば否応なしに命令に従い、突撃に向かう最後の華を咲かせる大切な特攻名である。「しかし陣内、おまえが佐賀県出身でないためにこの葉隠れをおまえにやるわけにはいかん」と言う、陣内は私の前から立ち去ろうともせず、頭を項垂れてしまった。その姿に私は祖国日本の捨て石となり、決死隊として出撃する陣内軍曹の頼みに「よし、葉隠れをおまえにやる。葉隠れの精神に恥じないよう頼むぞ」と言う、「ありがとうございます」と、さも嬉しそうに准士官室を出て行った。

その陣内軍曹の後ろ姿に、救国の精神に燃える若者の死に対する恐怖心どころか、凜々しい姿に胸が熱くなり、涙ぐむおもいであった。

8月15日の終戦まで葉隠特別攻撃隊の公表を知ることはできなかったが、基地に待機中に終戦になったものと私は推測している。もし生きていたら一度会ってみたいものと考えている。

最後に祖国のために散った戦友の冥福を祈る。